

宗教歌に見られる言語表現について ～『歎異抄』と『聖書』の言葉に着目して～

Über sprachliche Ausdrücke in religiösen Liedern
— Fokus auf die Worte aus “Tannisyou” und “Bibel” —

ガハプカ 奈美

はじめに

平成24年度より継続的に宗教を背景に持つ楽曲について、特にその「歌詞」は我々にとってどのような意味を持ち、どのような影響をもたらすのか、そして楽曲を演奏する奏者としていかに宗教を背景に持つ楽曲を分析、理解し、演奏すべきかを検討してきた。

本稿では、宗教歌の中でも『歎異抄』¹⁾を歌詞に持つ楽曲—カンタータ《歎異抄》(デュエット版)について、『聖書』を歌詞に持つ楽曲に用いられる「言葉」を取り出し、比較しながら歌詞を分析し、歌詞としての歎異抄の言葉と音楽の効果、また、歌詞として省略された歎異抄の言葉を、演奏を通していかに表現すべきかを考察する。

『歎異抄』は、親鸞聖人(1173-1262)の90年にわたる宗教者としての軌跡を記録した聖典である。内容には、晩年のものが多く、何の飾り気もない日常の会話や、親鸞聖人の信念を語っている様子などが記される。『歎異抄』には、著者名の記載がなく、現存している最古のものは、浄土真宗中興の祖、蓮如上人(1415-1499)の写本であるが、今日では、親鸞聖人の直弟子の唯円房(1222-1288、一説に-1289)が『歎異抄』の著者であるという説が有力である。いずれにせよ、『歎異抄』には著者の原本は伝わっておらず、現存する蓮如上人の写本に、

「右この聖教は、当流大事の聖教となすなり。無宿善の機においては、左右なく、これを許すべからざるものなり。」 釈蓮如(花押)

— この「歎異抄」は、わが浄土真宗にとって大切な聖教である。仏の教えを聞く機縁が熟していないものには、安易にこの書を見せてはならない。

釈 蓮如²⁾

とある。このため、『歎異抄』は浄土真宗の「聖教」として今日まで大切に扱われている。

本論の目的は、様々な共通項が指摘される『歎異抄』と『聖書』からその歌詞である言葉の真の意味を分析し、宗教歌としていかに演奏すべきか、その奏法を探ることにある。

1. 『歎異抄』と『聖書』

1-1(1) 『歎異抄』について

『歎異抄』とは、仏教学者の梯によると、文字通り「信心の異なることを歎く抄」―「抄」とは、「すぐれたることをぬきいだしあつむることば」³⁾といわれ、一般的には、抜き書きや注釈書という意味で使用される。さらに親鸞聖人が、確認された浄土真宗の正しい法義にそむく異議を説いて自らも惑い、人をも迷わせていくものを憐れみ歎き、正しい信心を得てくれることを念じて著されたものであるから『歎異抄』と名づけられたといわれる。『歎異抄』は全十八章から構成され、序と後序がおかれる。一章から十章は唯円が親鸞から聞いた語録を記録し、十一章以降は親鸞の教えが誤解して説かれたりしていることに対し、1つずつ指摘し、それらを正しく示している。今もなお読み継がれているのは、やはり親鸞の生の言葉が本書で味わうことが出来るというところに読む者の心を惹きつけるものがあるのであろう。

『歎異抄』は、次のように前半には、聖人の法話を記し、真実の信心の指標を示し、後半は様々な異議を挙げて批判を入れている。それぞれには序文がおかれ、最後には、聖人の法話を引用しながら著者の考えなど示す後序がある。そしてさらに付録として、承元の法難の顛末が記されている。

(一) 題号

- (二) 序（前序）
- (三) 聖人の語録（師訓）第一条～第十条
- (四) 序（中序）
- (五) 唯円の歎異（異議）第十一条～第十八条
- (六) 序（後序）
- (七) 承元の法難の顛末（付録）

の七段構成になっている。

内容について、前掲仏教学者の梯は、第十条は、一般に聖人の法話（師訓）とみなされているが、中序と一連のものとみて、第十条は以下の総説とみなすべきだという説もある⁴⁾。としている。

内容は、前序をはじめ、三所の序文に通じて記されているのは、異議に惑う人びとへの深い悲歎の情である。親鸞聖人在世の頃から関東の門弟たちから様々な異議がはびこっていた。その後時を経て指導者を失った各地の門徒たちは、徐々に「自己流」の勝手な解釈によって教えをゆがめたり、他宗の教えを取り入れて自力化したり、諸々のあら際に巻き込まれていった。そのような中にあり、『歎異抄』の著者は、法然・親鸞の両聖人によって開かれた万人平等の教えの道を閉ざしてはならないと考え、『歎異抄』という形で著して残したのであろう。その純粋な気持ちの表れが、

- (六) 序（後序） 前略…かなしきかなや、さいはひに念仏しながら、直に報土に生まれずして、辺地に宿をとらんこと。一室の行者のなかに、信心異なることなからんために、なくなき筆を染めてこれをしるす。なづけて「歎異抄」といふべし。外見あるべからず。

（現代文訳）幸いにも念仏をいただく身となったとしても、すぐに真実の浄土へ往生することが出来ず、その片隅にしかいたれないとしたら、なんと悲しい事でしょう。同じ念仏の仲間の中で自分勝手な信心がはびこることがないようにと、悲しみに胸を締め付けられる思いで筆をとり、これを書き

つづったのです。親鸞さまの教旨とちがわないよう、悲しみにくれながらも本書を記しました。本書を名づけ、『歎異抄』としましょう。同じ信心の人以外には決して見せてはいけません⁵⁾。

と記されているように、深い悲しみからこの書『歎異抄』と題され、今日まで受け継がれているものであることがわかる。

1-(2) 『聖書』について

次に『聖書』は、日本聖書協会の新共同訳聖書付録「聖書について」⁶⁾で、聖書はヘブライ語・アラム語・ギリシア語の三か国語で記されており、神と人間との歴史における出会いの物語であるとし、東地中海の諸国を舞台に、アブラハムとその子孫を中心に千有余年に及ぶ展開を描く。唯一神への信仰は紀元一世紀の終わりには、東地中海のあらゆる国に向けられ、多くの民族に、ついに全世界に伝えられることになる。このような神体験の集大成である、としている。

また、『聖書』には、「旧約聖書」と「新約聖書」の2つがある。「旧約聖書」は、ひとつのまとまった物語ではなく、「モーセ五書（律法）」（創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記の5書がある。これらはモーセが書いたと言われている）「歴史書」「文学（諸書）」（ヨブ記、詩篇、箴言、コヘレトへの言葉、雅歌からなり、知恵文学と呼ばれて、人生訓や教訓が多く入っている格言集である）「預言書」の4つからなる全39巻の書から構成されている。内容は、「モーセ五書」「創世記」から始まり、モーセの伝承と、神との契約が記される。「歴史書」はバビロン捕囚と解放に至るイスラエル民族の歴史が描かれ、「文学書（諸書）」知恵や人生訓^{しんげん}が示される。その後「ヨブ記」「箴言」が入り、「預言書」には歴代の預言者による手記が記され、「イザヤ書」「エレミヤ書」など、アブラハムの子孫であるイスラエル民族と神との関係を述べている。神は、ここにいる民をエジプトでの奴隷状態から解放し、シナイ山で契約を結び、約束の地カナンを与える。さらにその後の歴史の歩みによって自らを知らせる。そ

ここには、神による救いの体験に基づいて、未来の決定的救い主を待望させる数々の劇的な物語も織り込まれている。

「新約聖書」は、「福音書」「使徒言行録」「パウロの書簡」「公同書簡」「黙示録」に大別され、全27巻の書から成っている。内容は、「福音書」神からの（善い）知らせ（福音）をもたらしたイエスの教えと生涯を記した記録書である。「マタイ福音書」「マルコ福音書」「ルカ福音書」「ヨハネ福音書」の4つから成る。「使徒言行録」イエスの死後、使徒たちが行った伝道活動を伝えている。ペテロとパウロを中心に、初期キリスト教の発展を伝え、本書は、ルカが書いたとされる。「パウロの書簡」迫害者からイエスの死後にキリスト教徒に変わったパウロが、伝道をしながら各地の教会に書いた手紙のことを指し、「公同書簡」パウロ以外の使徒たちの手による書簡が入れられている。「黙示録」「新約聖書」内の唯一の預言書である、「ヨハネの黙示録」が記され、世界の終末、キリストの再臨、最後の審判などが語られている。

「新約聖書」を理解するためには「旧約聖書」を知ることが必要であり、両者は同一の神について語る連続の書であるとしている。

2. 『歎異抄』と『聖書』の言葉

『歎異抄』も『聖書』も思想書や哲学書として多く論じられてきているが、いずれの書も学問の世界だけのものではなく、世の中から排除されようとする人々、あるいは心が疲れてしまった人々の心の灯としての拠り所であり、常にどのような立場の人々へも目を向け続けるものである。

また、さらにそれらを歌詞として楽曲として扱う場合、より一層それを聴くものにとって理解しやすく、理屈抜きに「理解」が得られたり、「感動」を感じられたりするものだと考える。

そのため、我々奏者は言葉1つひとつに対して、宗教的な意味や考え方を知っておく必要がある。

本章では、我々が無意識に使用している言葉に目を向けて『歎異抄』と『聖

書』の中での意味を考えていく。

2-(1) 「回心」と「他力」について

まず、「回心」にはどのような意味が含まれているのか考えていきたい。

「回心」について、浄土宗大辞典（Web 版）では次のように示されている⁷⁾。

回心とは、啓示や悟りといった宗教経験を境に、その人の人格や生活様式、人生などが根本から一変するような過程をいう。また、その変化が急激で明確な場合はとくに、その中心契機となった宗教経験を指して、回心と呼ぶことも多い。例えば、パウロの回心、アウグスティヌスの回心、ルターの回心などはよく知られている。そもそも、回心という語は、植村正久などの明治期のクリスチャンによって用いられ始めた、英語の conversion の訳語である。したがって、回心はもっぱらキリスト教的な文脈で用いられてきた。しかしながら、この語が仏教の^{えしん}廻心を手がかりに成立したという事実からも示唆されるように、キリスト教の回心に相当する過程や経験は、仏教はもちろん、イスラム教にも認められる。それに留まらず、西田幾多郎が言うように、回心なくして宗教はないとすれば、回心は諸宗教の核心部分をつく語と言っても差し支えないであろう。

とあるように、『聖書』の中でキリスト教的文脈として用いられてきた文言が、明治期に用いられるようになり、キリスト教以外でも同じく、宗教経験を機にその人の人生が一変するような過程に対し、「回心」を用いるようになった。

キリスト教的読み方で読むと「回心」—かいしん だが、「回心」—えしんと読むと、仏教用語となり、①心を改めて、仏道にはいること。改心。②小乗の進行を改めて、大乘を信ずること。③浄土真宗で、自力の信仰を改めて他力を信ずること。あるいは名詞として用いると、「回心」—かいしん あるきっかけで、従来の生き方を悔い改め、新しい信仰に目覚めること。宗教的思想や

態度に劇的な変化が生じ、それまでの分裂・葛藤状況が解消し、統合された新たな自我が生まれる体験⁸⁾。というように、もともとキリスト教的な文脈で用いられてきた言葉は、「宗教的背景」を持ちつつ一般的に用いられるようになっている。

ここでカンタータ《歎異抄》の歌詞に目を向けてみると、第3曲「念仏者は無碍の一道なり」の中で『歎異抄』第八条に示される「念仏は行者のために非行・非善なり…ひとへに他力にして自力をはなれたるゆゑに…と前掲「回心」一えしんの③の意味で出てきている、自力の信仰を改めて他力を信ずること。「他力」という言葉が出てくる。この「他力」という言葉は、浄土真宗での考え方として、挙がっている。「他力」一たりき①他人の助力。②〔仏〕自己の力で悟るのではなく、ほどけや菩薩の力を借りること。仏・菩薩の加護のこと。多くは浄土教で、衆生を極楽へ救済する阿弥陀仏の本願の力のこと⁹⁾。とあり、単に、他者に任せるといようなものではなく、あるいは、こちらから何かを求めていくものではなく、向こうからやってきてそれに当たる。というような意で使用される。

このようにキリスト教的言葉や考え方から派生したものが、他の背景を持つ宗教へ自然な形で取り入れられ、独自の意味を持つ大切な言葉に変化、そして発展していることがわかる。

2-2) 「悪人」の扱い

次に『歎異抄』と『聖書』における「善人」、「悪人」の意味について考えていきたい。

『歎異抄』には親鸞聖人の「悪人正機説」があり既に様々な仏典や書物の中に多く出てくる。その意味を言葉通りに示すと、「善人でさえ浄土へ往けるのだから、まして悪人はなおさらだ」ということであるが、「善人」よりも「悪人」の方が浄土へ往くにふさわしいというように読み取れる。しかしそのように言葉を理解して演奏をすることは避けるべきである。というのも、法然、親鸞以

前の仏教での教えの中には、「悪人も救済される」とあるが、それには例外があり、「五逆謗法を除く」、「十悪五逆の悪人」¹⁰⁾は救われないとあった。しかし、法然、親鸞の教えが記されている『歎異抄』として残っている本文をみると、「全ての者が例外なしに、誰もが救われる」と変化がみられることがわかる。また、親鸞聖人の思想核心である、『歎異抄』について「100分 de 名著」NHK¹¹⁾で放映されるほど、一般的に広く学ぶことが出来る知識でもある。「悪人正機」及び「他力」という言葉に込められた意味を深く理解して演奏することは必須であることがわかる。

一方『聖書』には、「イエスは罪びとのために来た」というような表現でさらに、『イエスはこれを聞いて言われた、「丈夫な人には医者はいらない。いるのは病人である。わたしがきたのは、義人を招くためでなく、罪人を招くためである」。(マルコによる福音書第2章17節)¹²⁾というように健康な人—善人、病人—悪人(罪びと)というように記される。また、「悪」に対する考え方として、「愛には偽りがあってはならない。悪は憎み退け、善には親しみ結び、兄弟の愛をもって互いにいつくしみ、進んで互いに尊敬し合いなさい。」(ローマ人への手紙12章9節—10節)¹³⁾本文に対し、教会聖職者であり、『聖書』の新たな発見とし、『聖書』の言葉の本来の読み取りに努める本田哲郎¹⁴⁾は、ここで言う「悪」は法律に背くなどの「悪」ではなく「抑圧」という事、また「善」は、自分が悪人だという意識のない人などではなく、「相手と親身にかかわる」ような人の事を言うという¹⁵⁾。

このようにいずれの書にも同様に「悪人」、「悪」、「善人」「善」があり、言い方は違ってはいるが、実に『歎異抄』にも『聖書』にも酷似した表現で救いの対象について記されていることがわかるであろう。また、いずれの書も同様に「言葉」として用いられ、それらを読んだ者がそれぞれに理解しながら、読み継がれていることも忘れてはいけない。だからこそ我々奏者は、様々な宗教的、社会的などの背景をも理解した上で一つひとつの「言葉」—「歌詞」と向き合い演奏するにあたって追究すべきだと考える。

3. 『歎異抄』を歌詞に持つ楽曲における言葉の解釈について

ここまで『歎異抄』と『聖書』における言葉の類似点などを述べてきた。それらを前提に、本章では、『歎異抄』を歌詞に持つ楽曲の言葉の解釈について考えていきたい。

カンタータ《歎異抄》の作曲者である大谷は、あくまでも演奏会用の仏教に基づく宗教作品として構想されており、法要・儀式用のものでも、またこのままの形で誰でもが演奏できるような伝導用の愛唱歌的な作品でもないこと。さらに本願寺の作品としてのみならず、芸術音楽としての今日の音楽としても、つまり一般の演奏会のプログラムにもものほり得る作品である¹⁶⁾と述べていることから、本章では、現在使用している言葉の意味として同様に理解をするためにいくつかの「言葉」を取りあげ、どのような宗教的背景や人の思いがあるのかについて詳細に見ていく。

3-1(1)「梁塵秘抄」の言葉について

「善人」と「悪人」に関しては、が、「言葉」について当時どのような感覚で使用されていたのか、また、親鸞聖人がそれらをどのように弟子たちへ伝えたのか、文字だけでは全く違う環境で現代のわれわれには、その本意はわからない。

そこで、当時の人々が、その時代をどのように生き、物事に対して感じていたか知るために、その時に流行した「歌」を調べ、その真意に迫りたい。

そのために「今様」¹⁷⁾についてその歴史的意味と宗教、とりわけ仏教との関係を書かれた言葉を中心に概観し、『歎異抄』に書かれた言葉について少し考えていきたい。

「今様」とは、平安時代に生まれた歌詞の集大成であり、『梁塵秘抄』という歌曲集に集約される。本歌曲集は、後白河法皇（1127-1192）をはじめその周辺にいた貴族たちが好んで唱えた「今様」—新しい音楽の数々を20巻にも及ぶ書物にまとめたものである。歌詞の多くは、仏教に関わる内容の歌も多くある

と言われている。また、本書の歌詞を生み出したのは、これまでにあった『万葉集』などとは違い、白拍子^{しらびょうし}¹⁸⁾や遊女、傀儡子¹⁹⁾たちが歌の節を教えている。このころ貴族は、和歌を好んで作ったが、本歌集『梁塵秘抄』の歌詞を作ったのは、宮廷外で、まさにその時代を生き抜いていた民衆である。

11世紀から13世紀に大流行した「今様」からその当時の様子を紐解き、どのような気持ちで生きていたのかを示す。「今様」はその当時にとっては、「全く新しい歌」であり、現代で言うならば、J-ポップやK-ポップに見られる歌詞のあり方の変化と同じく当時の俗謡と言える。

とは言え、現在の様な方法で記譜され、録音や録画があろうはずもなく、平安時代の音楽やリズム、歌いまわし（旋律）などは想像する手段がない。また、歌詞として、『梁塵秘抄』に集められたが、大部分は失われ、今日残っているのは一部分である。

当時の『梁塵秘抄』は二部から成っており、第一部は本来の「梁塵秘抄」で、今様やその他の歌詞が集められ、第二部は、「梁塵秘抄口伝集」で、後白河法皇（1127-1192）がそれら歌曲についての意見や感想などを記した覚書であった。第二部は仏教に関係のある歌詞も多く残っていると言われる、いくつかその例を挙げ、口語訳と当時の生活を振り返ってみたい。

【240】 儂き此の世を過すとて、海山稼ぐとせし程に、

万の仏に疎まれて、後生我が身を如何にせん

【口語訳】

はかないこの世で暮らしていくために、漁師・獵師として多くの命を奪い続けている我々は、

すべての仏に見放されてしまった。今後（来世）はどうしたらよいのだろうか。

【258】 熊野に参らむと思へども、徒歩より参れば道遠し、すぐれて山峻し、

馬にて参れば苦行ならず、空より参らむ、羽賜べ若王子

【口語訳】

熊野への参拝は途中に紀州の山越えがあつて道が険しく苦行である。

馬に乗って行つては苦行の意味がないから空から参上しよう。

【260】 花の都を振り捨てて、くれくれ参る臚けか、

且つは権現御覧ぜよ、青蓮の眼を鮮かに

【口語訳】

花の都を振り捨ててとほとほまいるのはおろそかな信心でしょうか。

一方、熊野権現さまのは、青蓮のような眼をはっきり開いて私をご覧じてください。

後白河法皇も好んで参詣したといわれる熊野にまつわる歌詞は多い。その中でも、【258】や【260】の歌詞には、その道中の厳しさが生き生きと表され、その難路に耐えてこそ願ひ事が叶えられる条件であつたという事がわかる。また、特に【258】の歌詞に日本文学者の西郷は、「熊野へ徒歩はつらいが、騎馬では「苦行」の意味がないといいながら、「空より参らむ」はつじつまの合わない話である。これは一種のユーモアであり、この愉快的逆転は、いかにも民衆歌謡らしい歌いぶりである」²⁰⁾など当時の民衆歌謡らしさの特徴がこのような言葉の形として表されていたと述べる。

3-2) 「梁塵秘抄」での言葉の扱い

歌集というと「古今和歌集」「新古今和歌集」や「万葉集」の日本を代表する歌集が思い浮かぶであろう。「古今和歌集」は和歌に限らず、漢詩も集めた勅撰漢詩集も含まれる日本最初の和歌集であり、当時の国家の繁栄や天皇の権

威を示すような歌が収められている。

「新古今和歌集」は、鎌倉時代に編集された勅撰和歌集で、その通称として「新古今集」と言う。「古今和歌集」同様に国家の繁栄や天皇の権威を示すために藤原定家などが中心に和歌を選び、編集を行った。

「万葉集」は日本最古の歌集であり、現在の元号「令和」の出典も「万葉集」という事で話題になったばかりである。また、「万葉集」の歌は、七五調、四句一章の構成になっており、親鸞聖人は、日本最古の和歌集「万葉集」（759年成立）で日本人のリズムとして確立した「万葉リズム」と言われるリズム―七五調を用いて、一般人が読み解くには難解である『教行信証』（漢文）の思想を和讃「浄土和讃」「高僧和讃」「正像未和讃」の三部、すなわち「三帖和讃」に和文で表した。和讃が七五調の仮名まじり文で詠まれたことで口ずさみやすいようになり、一般的にも広まっていったといっても過言ではない。我々日本人にとって七五調のリズムは言葉、歌、音楽の基盤として欠かせないリズムである。

しかし、「古今和歌集」、「新古今和歌集」「万葉集」いずれもほんの一部の先人―身分の高い人々の生活の中で生まれた歌がほとんどであり、当時の生活を知るには程遠い。

他方「梁塵秘抄」は、前述のように当時の民衆の想いや生活から生まれた「声楽作品」である。前述のように、本来は音楽やリズム、歌いまわしがついており、時に舞もついてる歌であったが、今となっては、歌われていた旋律や調子、動きを知る由はない。とは言え、「梁塵秘抄」に出てくる「言葉」は「詩」として読み取るのではなく、「歌詞」として読みとるべきであると考える。

その一方で我々はしばしば、その曲は覚えているが歌詞は忘れたというのが普通だが、これは音楽が詩に、旋律が歌詞に優位し、後者が前者の婢となっているため起きる現象にほかならない。

詩人の作品を音楽にセットする際にも、近代の作曲家は詩的効果より音楽的效果を歌詞よりは音楽の調べの方をさき立てる²¹⁾。と現代は「音」や「旋律」

が上位と捉えられる傾向にある。しかし、「梁塵秘抄」に目を向けると、詩と音楽、言葉と音楽との関係は均衡していたことが明確となってきた。

親鸞聖人は、そのような民衆の感覚でも仏の教えを浸透させるためにどのような工夫をしたのか、『歎異抄』の序を要約すると、「親鸞聖人の師である法然上人のお説きになった易行の道²²⁾(易行の念仏)は、貧しい者、字の読めない者も、誰でもやさしく行うことの出来る教えである。」

と記されている。

3-1で挙げた【240】の歌(梁塵秘抄)は、「卑しい職業に就いている私は、すべての仏に疎まれて…ああ」と嘆く民衆の歌である。このような想いを抱える民衆は当時大勢居た。そのような想いに対し、『歎異抄』はわかりやすく応えていることがわかる。

4. 『歎異抄』を歌詞に持つ楽曲カンタータ《歎異抄》について

交声曲《歎異抄》 歌詞原文 作：唯円(13世紀)、親鸞聖人(12～13世紀)
作曲：大谷千正の『歎異抄』に書かれている原文と《歎異抄》の歌詞として用いられた言葉について取り上げ、演奏者としての表現のあり方を探っていく。

4-1(1) カンタータ《歎異抄》の構成

交声曲《歎異抄》の構成は、次のようになっている。大谷による管弦楽版の作品解説²³⁾を基にまとめた。()内は、2重唱版の構成。

・「プレリュード」Andante

曲は詩情豊かに、霧のように立ち上がり、やがて天上からの響きが聞こえてくるような荘厳な雰囲気を出しつつ、その合間には第9曲の「回向」の響きも聞こえてくる。(ソプラノ)

・「三^{さん}帰^き依^え」Larghetto

第1曲から一転、輝きをもって「三帰依」が繰り返される。(ソプラノ・バス)

（管弦楽版、ピアノ 2 台版

・「第一章：弥陀の誓願」 Andante spiritoso

和声的響きとカノンにより前半が奏され、後半は、4 声のフーガが入る。）

・「第二章：念仏者は無碍の一道なり」 Andante

ソリスト（ソプラノとバス）と合唱が交互に歌う抒情的な曲。（バス・ソプラノ）

・「第三章：善人なおもつて往生をとぐ」 Lento

ゆりかごリズムを使用した子守歌。ソリスト（バス）と合唱の掛け合いで音楽が進行する。（ソプラノ・バス）

・「第四章：弥陀の五劫思惟の願を」 Andante espressivo

ソリスト（ソプラノ）が抒情的な旋律を歌う。やがてカノンが聞こえてくる。（ソプラノ・バス）

・「念仏」 Adagio

混声合唱によって念仏が歌われる。（バス）

・「和讃」 Lento

二人のソリストと 4 声のフーガによって荒涼とした雰囲気で歌われる。（バス・ソプラノ）

・「回向」 Lento

ソリスト、合唱の全員で回向を歌いつつ静かに楽曲を終える。（ソプラノ・バス）

交声曲《歎異抄》には、管弦楽版（全 9 曲）、ピアノ 2 台（或いは連弾）伴奏版（全 9 曲）、ピアノ伴奏によるバスとソプラノのための 2 重唱版（全 8 曲）、ピアノ伴奏による歌曲版（バス独唱版全 4 曲／ソプラノ独唱版全 3 曲）があるが、本稿では、京都女子大学創基100周年記念演奏会（2021年 2 月予定）で実演予定である、ピアノ伴奏によるバスとソプラノのための 2 重唱版（全 8 曲）について述べていくこととする。なお 2 重唱版には、上記下線「第一章：弥陀

の誓願」は省かれている。

4-2) カンタータ《歎異抄》(デュエット版)の歌詞

〈プレリュード〉

南無阿弥陀仏

〈三帰依〉

南無帰依仏

南無帰依法

南無帰依僧

〈念仏者は無碍の一道なり〉

第七条 一 念仏者は無碍の一道なり。そのいはれいかんとならば、信心の行者には天神・地祇も敬伏し、魔界・外道も障碍することなし。罪惡も業報を感ずることあたはず、諸善もおよぶことなきゆゑなりと云々。

第八条 一 念仏は行者のために非行・非善なり。わがはからひにて行ずるにあらざれば非行といふ。わがはからひにてつくる善にもあらざれば非善というふ。ひとへに他力にして自力をはなれたるゆゑに、行者のためには非行・非善なりと云々。

第五条 一 親鸞は父ははの孝養のためとて、一返にても念仏申したること、いまだ候はず。そのゆゑは、一切の有情はみなもつて世々生々の父母・兄弟なり。いづれもいづれも、この順次生に仏になりてたすけ候ふべきなり。わがちからにてはげむ善にても候はばこそ、念仏を回向して父ははをもたすけ候はめ。ただ自力をすてて、いそぎ浄土のさとりをひらきなば、六道・四生のあひだ、いずれの業苦しづめりとも、神通方便をもつて、まづ有縁を度すべきな

りと云々。

〈善人なおもつて往生をとぐ〉

第三条 一 善人なほもつて往生をとぐ、いはんや悪人をや。しかるを世のひとつねにいはく、「悪人なほ往生す、いかにはんや善人をや」。この条、一旦そのいはれにあるに似たれども、本願他力の意趣にそむけり。

そのゆゑは、自力作善の人は、ひとへに他力をたのみこころかけたるあひだ、弥陀の本願にあらず。しかれども、自力のこころをひるがへして、他力をたのみてまつれば、真実報土の往生をとぐるなり。

煩惱具足のわれらは、いづれの行にても生死をはなることあるべからざるを、あはれみたまいて願をおこしたまふ本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人、もつとも往生の正因なり。よつて善人だにこそ往生すれ、まして悪人はと、仰せ候ひま。

〈弥陀の五劫思惟の願を〉

後序 右条々は、みなもつて信心の異なるよりことおこり候ふか。故聖人（親鸞）の御物語に、法然上人の御とき、御弟子そのかずおはしけるなかに、おなじく御信心のひととすくなくおはしけるにこそ、親鸞、御同朋の御なかにして御相論のこと候ひけり。（中略）「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。されば、それほどの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」と御述懐候ひしことを、いままた案ずるに、善導の「自身はこれ現に罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた、つねにしづみ、つねに流転

して、出離の縁あることなき身としれ」(散善義)

(中略)

煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもつて
そらごとたはごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまこ
とにておはします」とこと仰せは候ひしか。(後略)

〈念仏〉

南無阿弥陀仏

〈和讃〉

無慚無愧のこの身にて
まことのころはなけれども
弥陀の回向の御名なれば
功德は十方にみちたまふ

〈回向〉

願以此功德
平等施一切
同発菩提心
往生安楽国

(太字；歌詞に使用された箇所、斜字；歌詞には使われていない箇所を表した)

4- (3) カンタータ《歎異抄》歌唱と歌詞

演奏するにあたり、カンタータ《歎異抄》(デュエット版)の第3曲、第4曲、
第5曲にあたる曲目の中の歌詞は、2.『歎異抄』と『聖書』の言葉で取り扱っ
た言葉が中心となる曲目である。

本節では『歎異抄』を歌詞とする第3, 4, 5曲に限り解説をしていく。

第3曲〈念仏者は無碍の一道なり〉

四分の四拍子、Andante

2小節の静かなピアノ前奏から始まる。この前奏はまるで「念仏とは、妨げるものがない、ただひとすじの道を行くことである」のひとすじの道が目の前に現れたようである。そして、バスが力強く「念仏者は…」と第七条の一節を4小節唱え、すぐにソプラノが、第八条の一節を変拍子を交えながら6小節唱える。その後二重唱となり第五条を共に唱える。本楽曲では、前述のように、『歎異抄』の本文を省略して歌詞としているが、その省略が行われた部分には、①変拍子を用いたり、②ピアノの伴奏形式を変更したり、③唱える声種や形態に変更を加えることで、聴いている者にその背景にある意味と実際の歌詞として使用した『歎異抄』の本文を「言葉」―「歌詞」として融合したものになっている。

第4曲〈善人なおもつて往生をとぐ〉

八分の六拍子、Lento : au rythme de bercement

前述のように、作曲者の大谷は本楽曲を、「ゆりかごリズムを使用した子守歌」と示しているように、レガートで緩やかな、しかしひとすじの光が差し込むようなピアノ前奏から始まる。

その後、『歎異抄』の中で一番有名とされる本文がバスによって軽やかに唱えられ、ソプラノのオブリガードが入ることで、子守歌の緩やかな雰囲気から歌詞の世界観へと聴いている者を引き込んでいく。その後、バスとソプラノで同じ歌詞「はなることあるべからず」を同時に力強く唱え、「あはれみたまひて…」の歌詞で、最初のピアノ伴奏のゆりかごリズムに戻り、バスが歌詞を唱え、ソプラノがオブリガードを奏で、最初に戻った安心感を与える。そのことにより、聴いている者に歌詞の意味を考えさせる余地を与えているようでもある。

最後にもう一度ピアノ伴奏のゆりかごリズムが登場し、「まして悪人は」―『歎異抄』第三条で一番大事であろう「言葉」をバスとソプラノの壮大な二重唱を締めくくっている。

第5曲〈弥陀の五劫思惟の願を〉

四分の三拍子 Andante espressivo

本曲は、『歎異抄』の後序を歌詞に持つが、最初の部分が省略されているため、第3・4曲の前奏の倍である4小節の前奏が付けられている。そのことにより、後序の文頭「右条々は、みなもつて信心の異なるよりことおこり候ふか。」…と省略した部分へ想いを馳せる時間が用意されているようである。その後、抒情的にソプラノが唱え始め、実に9小節をソロで歌う。

次のフレーズでは、ソプラノとバスに二重唱で、「されば、それほどの業をもちける身…」とこれまでの抒情的な歌を打破するようにマルカートで厳しいピアノ伴奏で奏でられる。「本願の」という言葉をきっかけに再びソプラノが抒情的に歌い始める。そして、最後は、本楽曲で最も大切であろう言葉である、「まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておはします」をソプラノとバスの二重唱で力強く締めくくる。

まとめ

ここまで歌詞に宗教を背景に持つ楽曲を演奏するにあたり、奏者としてどのように解釈すべきか述べてきた。また、背景にある宗教を理解するために、聖典そのものを歌詞として多く使用される『聖書』と『歎異抄』に出てくる「言葉」の意味の相違点を探ってきた。

また、聖典を歌詞として、楽曲に当てはめたとき、どのように解釈していくべきかを検討し、歌詞にどのような言葉が用いられ、それに作曲家がどのように考え1つの作品として作り上げたかという事を辿る事はとても重要であるという事を再確認した。

本稿では、オラトリオ《歎異抄》から一部『歎異抄』と歌詞とした楽曲の
みを取りあげ、演奏における解釈を述べたが、歌詞としては省略されている部
分にも、楽曲として演奏することで、それを奏する者、聴く者に解釈の余地が
与えられていることが分かってきた。

さらに、カンタータ《歎異抄》でのその歌詞の省略は、当然の事ながら意図
してなされているのだが、『歎異抄』と『聖書』との言葉に関する考え方につ
いても確認したことによって、より深く理解することが出来た。

歌詞の省略は、その宗教的背景を崩すことなく、より一層『歎異抄』に書か
れた内容の言葉なき説明を果たしていることを明らかにした。

前々稿「宗教歌の原語演奏について」～ドイツにおける M. ルターの宗教改
革と音楽から～（ガハプカ、2018）²⁴⁾にも述べたが、歌詞の内容は大方説明し、
理解を求めその後は原語のまま演奏すべきであり、それが一番その楽曲として
の魂が宿った形で伝わる。まして背景に宗教的な歴史を担っているならばなお
さらそうである。作曲者の想い、作詞者の想いにもそれぞれの国の持つ特色、
環境、言語的環境、そして宗教的考え方が反映されているからである。という
事をより一層意識して宗教歌を演奏し、今後はさらに音楽的な分析にも研究を
広げ、作詞者、作曲者の想いを的確に表現できる歌唱を追究していきたい。

註

- 1) 『歎異抄』は、宗教者親鸞聖人の法語あるいは日常に若い門弟との間に交わさ
れた対話を、親鸞聖人の直弟子の唯円房が著したと伝えられる。（西暦1300年
前後）
- 2) 「歎異抄」（文庫判）現代語訳付き 本願寺出版社 2004年第4刷 p. 114
- 3) 2) の書 p. 149 梯實圓 かたはしじつえん 昭和2年10月3日、兵庫県飾磨郡夢前町前之庄に生
まれる。昭和41年3月、本願寺派宗学院卒業。浄土真宗本願寺派廣臺寺・前住
職。浄土真宗教学研究所・前所長。浄土真宗本願寺派勸学。行信教校教授。浄
土真宗教学研究所客員研究員等を務め、平成26年5月7日往生。梯實圓「親鸞
教学の特色と展開」2016年 法藏館 pp. 415-418参照
- 4) 2) の書 pp. 150-151
- 5) 2) の書 pp. 108、五木寛之・本田哲郎「聖書と歎異抄」東京書籍 平成29年

- pp. 236-237 五木寛之私訳参照
- 6) 一般財団法人日本聖書協会
<https://www.bible.or.jp/know/know01.html>
参照2020年 8月20日閲覧
 - 7) Web 版新纂浄土宗大辞典
<http://jodoshuzensho.jp/daijiten/index.php/%E5%9B%9E%E5%BF%83>
参照2020年 9月 3日閲覧
 - 8) 三省堂 大辞林 第三版 Web Dictionary
<https://www.weblio.jp/content/>
2020年 9月 4日閲覧
 - 9) 8) の書
 - 10) 両親を殺したり、仏教を誹謗したりした者という意味。
 - 11) 100分 de 名著の53番目の名著紹介番組「歎異抄」全 4 回
https://www.nhk.or.jp/meicho/famousbook/53_tannisyou/index.html
 - 12) 「聖書」新約聖書 1954 旧約聖書 1955 日本聖書協会 1986 新約聖書：マルコによる福音書は16章から成る。
 - 13) 同上書 新約聖書：ローマ人への手紙は16章から成る。
 - 14) 本田哲郎：1942年生まれ上智大学卒業後、フランシスコ会に入会。ローマ教皇庁立聖書研究所を卒業。91年より大阪西成区釜ヶ崎で日雇い労働者に学びつつ聖書の新たな翻訳を行ったり、研究会などを行っている。著書に『小さくされた者の側に立つ神』、『釜ヶ崎と福音』などある。
 - 15) 5) の書 pp. 42-65
 - 16) 「カンタータ歎異抄」大谷千正による作品解説より 企画・制作浄土真宗本願寺派勤式仏教音楽研究所 ヴェッキオボスコレーベル
 - 17) 「今様」とは、当時流行っていた歌曲だが、記譜はなく、その歌唱法なども伝承されていない。独唱者が打楽器の簡単な伴奏と共に唱ったと言われる。『梁塵秘抄』の中に、後白河法皇 (1127-1192) が当時の流行り歌の歌詞を集めて残っているものである。全部で20巻はあると言われているが、今日伝えられているのはその一部分のみである。
 - 18) 白拍子しらびょうし：平安時代末期から室町時代初期にかけて行われた歌舞の一種でその歌舞を演じた舞女の事。当時は、宴席で舞われたといわれる。
 - 19) 傀儡子くぐつ：人形遣いの古称。平安末期の『梁塵秘抄』に「てくぐつ」の語が出てくるがこれは、手で直接人形をもって操る人形遣いを指す。これらが後に浄瑠璃と結びついて人形浄瑠璃が発生していった。
 - 20) 西郷信綱 「梁塵秘抄」ちくま文庫 1990 pp. 122-129

- 21) 西郷信綱 「梁塵秘抄」ちくま文庫 1990 pp.156-158
- 22) 「易行の道」とは阿弥陀仏の本願力によって浄土に往生してさとりを開く他力の道。易行は難行に対する語である。『歎異抄』（文庫判）現代語訳付き 本願寺出版社 2004年第四刷 pp. 11-12、五木寛之・本田哲郎『聖書と歎異抄』東京書籍 平成29年 pp. 199-200 参照。
- 23) 「カンタータ歎異抄」大谷千正による作品解説より 企画・制作浄土真宗本願寺派勤式仏教音楽研究所 ヴェッキオボスコレーベル
- 24) ガハブカ奈美『宗教歌の原語演奏について』～ドイツにおける M. ルターの宗教改革と音楽から～ 京都女子大学宗教・文化研究所『研究紀要』第31号 pp. 13-32 2018 ルターの宗教改革と讃美歌が西洋音楽の発展に大きく寄与し、その西洋音楽の影響を大きく受けながら、独自に発展し続けている仏教讃歌の原語演奏について述べている。

文献

- ・五木寛之・本田哲郎 『聖書と歎異抄』 東京書籍 平成29年
- ・大谷千正 （浄土真宗本願寺派 勤式・仏教音楽研究所委嘱）カンタータ《歎異抄》（デュエット版全8曲）JFC-0418
- ・加藤周一 『梁塵秘抄』岩波書店 1986
- ・金田一春彦 『日本語の特質』日本放送出版協会 昭和63年第15刷
- ・西郷信綱 『梁塵秘抄』ちくま文庫 1990
- ・斎藤剛毅 「浄土真宗とキリスト教 —『歎異抄』の親鸞と『聖書』のパウロ— 福岡女学院大学紀要 人文学部編 福岡女学院大学紀要 人文学部編 (11), 53-82, 2001-02福岡女学院大学人文学部
- ・末本文美士 『日本仏教入門』 角川選書 平成26年2刷
- ・出口治明 『哲学と宗教全史』ダイヤモンド社 2019第7刷
- ・早島大英 『親鸞と浄土真宗』三笠書房 2013
- ・坂東性純 『親鸞和讃』信心をうたう NHK 出版 2010
- ・『聖書』新約聖書 1954 旧約聖書 1955 日本聖書協会 1986
- ・『歎異抄』（文庫判）現代語訳付き 本願寺出版社 2004年第四刷

音源

- ・カンタータ歎異抄 企画・制作 浄土真宗本願寺派 勤式仏教音楽研究所 ヴェッキオボスコレーベル R-0350507OP VBC-2304 2003

<キーワード>

宗教歌 歎異抄 聖書 言語表現